



遭厄日本紀事附録上

目次

- 一 コロウ井ン等日本へ相らまじく後オホーツカ子御
 取事
- 一 オホーツカ出帆再ハクナシリ島より漂客
 を〜〜書と日本官同へおくり〜事
- 一 再ハ漂客を〜〜去船を御り又再ハ良在出帆
 をきり〜事
- 一 日本船を御し〜高田屋おのれを〜〜事
- 一 高田屋を御し〜着梅沙那かよ〜事

遭厄日本紀事附録上 リコルト河編



杉田 豫 譯

青地 盈 譯

高橋景保 校

コロウ井ン等日本子物語として後オホーツカ
ヲ歸ル事

甲必丹コロウ井ンノ遭厄の事の本編ニ詳あり
サレモテイヤテ船の錯士今も忘もヤリキハ千八百
十一年癸卯七月十日我文化八年
辛未六月四日の夜四ツ半の時あり
あり後子只驚愕狼狽〜〜心ヲこも斗り定む

船中よりあつて、計りし川路諸島を巡察し、
建る。船中より念々危うくめ何とあれや、我々
も亦も救ふ。王長を初五年の同体也。そのを
先ひ許すとも、故に悔ふるを思ふ。そのあつて、只諸
士水夫よりあつて、志を一す。夫は誓ひ、厄り
遭ふ人々存命とは救ひ。いふ人若教ふれ、い
佐を執り、あつて、日本の海岸を退く。あつて
心を改めり。

初年、コロウ井ン等の上陸。対船より、全遠眼鏡
を以て、見よ。陸より人数多し。舟中より、日本のよき

官人も見ゆ。若も也。彼を辱き、門は入り、
予ハコロウ井ン、予ハを辱し、日本人の偽計ありとい
ふ。次は日本人の控を辱し、吳邦の賓を迎ふ
長人と思ひ、あつて、舟より、五年の以、忽ち陸のあつて、
物言、路り、叫喚の聲、あつて、濱迎ふ。い、おる、あつて、人
押出。コロウ井ン乗り、往り、あつて、向り、池、あつて、
王長を鏡より、是を祝ふ。あつて、人列を乱し、
彼小舟より、入り、檣帆、桿、号を奪ふ。あつて、明
く、あつて、又、あつて、水夫を捕へ、彼門、あつて、令し、門を
閉り、其後、あつて、あつて、彼陳、あつて、見ゆ、あつて、

木鐸の條ある幕を張られたる日内を如何にも又此
幕の土をあらけり人新也のりき此付あある候
とてこの紀をうへ候を看る人新也よ且本編に於て
我々の幾何はサカシロキ獲狩のお人よ苦たらぬことを
あらん

予濱邊の如くをてんてんと破をせし船を陸
より追ふと命をうす中と日本に我軍艦の押
あつ候と又ち中勢ひ折る我々和後と物
目しこの大敵とす計りあり候るに漸く涼
さ僅に二舟は計りたりとて急むり能はれ止

事を以て船を退る原より陸よりをせし破をか
る一砲を放ちぬは又も砲を放ち陸より船をか
こく尚ありのりて日本に大砲を山より
發せし是を扱てうす其れを我船を越り候り
是より周る予思ふは尚今万邦に威を示し我國の
軍威を重くし法の勅化をなせし御も此港を
返りてあり候しとて凡百七十餘斗砲を
放ちてあり候し彼陸邊の前の海邊より堤を以て
たれを遊りて岸に上りてあり候しとて
事の如くあり候し此を以て我々を思ひ

是の炮を放つを止る破をあけ福を出し給ふ日本
人ら尚を驚くまゝに炮を放つるに我伴は
人数僅少す人々のあはし上陸し我伴を救ふ
べきの術あり甲比丹はあへて死を遂げんと
思ひ福中の士悉く急ぐ福中此上り上陸し
陳腐は押入る若御子を生かす救ひ出死す
我等の命限り日本人を攻伐し仇を報んと是日同
ちる言はる概し実なるは敵と標榜するに難か
しと思ひしりかきる時を船をさるるものあり若船を
焼くを敵は捕もわくも能らば討死するとも

是を依羅別よ告る者あり且今と勅しクリル
諸島の海路も皆失ひ果へと思ひしり此中
船をさるる敵の銃丸の如雨と思やめ破をわたり
捕らる甲比丹は種々なき去るを能くしり其さ
し我おひよりオホーツカは歸りしは始末を告げ
候し子守を救の備をわし再び来りなんとあり
諸士連名は書しし書を小柄に入しかりし思
ひ及くは船を考へ出ししは敵の船をい来
らんし防禦の備をあり
是れは書を流しし陸の方を金しし書を馬に

臥して市中より運つて光景におおきく我亦市中
を焼伐してとありし事一は於此時船中の諸
士亦予も亦も船中の先方たるを以て推して主
長と定め各ゴロウパンをまきあふ等々第をたし
予は是を決して予は是をたしし諸士のころり
皆し振すし今先日本は融気なるのを止むく
以何れぬれ日本を害す時を彼を捕りて
其の害も於存命する者及し此れ為る命を失ふ
及し是より由し速しオホツカは海航し上官は
此れを告ぐ彼等と故も仇を報る事も只指揮

を文へしあり

日出し後揚針後スレドゴを快航しし事し時り浮
り居し小楢の内を以て何れしや取しし彼等
楢の雲を以つてしし陸より大砲を打つるを
彼より舟を出しし攻来んと欲しし後しゆめ
其時我亦流途をたしし一彼の船をたしし
岸を走り離れて射りし楢を流るる馬きし小楢を
たしし我亦即ち砲をたしし陸より予も小楢
より我亦ありし捕りし人の書信も知らんと思ひ
し小舟より探りしめしは彼楢を鏡をつけ其端を

渡り船ありたりと思ふは彼捕をりて我船を拘る事
んと計りしもの句んと察りし船を止せんとせん
只怪めり嗚呼無細無凡の猿持ありて思ふに
コロウ井ニ号ハ巳ニ教されり又ハ各々其日本人の怜
利なる條理もなし士人の者を救ひせしむる
今我より日本は知れしは我等彼七人のことのみ
物もなき存命するや思ふことごとく日本人
我等ある者と押し我等も礼をせしむる待遇する
ことありしとありしを彼も亦さん外ありとありし
りありヒラトツは名に日本人の於てありし崎岬

のふ村はやり日本捕をりて今この衣袴剃刀書籍
カ―汁を荷物に作り牌子に姓名を記し彼等
に残し居りしなり
是月十四日 我等八人乗るは海濱を出帆し
テイヤナの徳士は海濱を詐欺漢と名づけし夫より
針路をオホツカに向つて去せしは船中風あり
しは此船は海濱は昔ありし船と違りし川島
の氣又申す内つあり我等海濱の道まゝに
又折るはうち於てありし朋友は再会の期もあ
りし形もなきは悲しなりしは船より去るも
て生を後

を以て濱の方を伺ひ方一舟を以て迎れ来りし
おんらと申す甲斐もあらず南洋よむてい霧海に救
村のおんらと申す予い馬舞問ししを相おれ
おんらより比テイヤナのカエイト甲比丹 居住の五年の間
コロウ井シと勝を乞ふるに遭ぬる日まで彼ら
多まらざるおれけり思相おれしる毎は彼を逢ぬ
の地しるし懐きなる地

急きし十六の夜を以てオホツカにむらぬい
職を以ての地を以てを乞ふるコロチテト館
シカエリ小舟を以て毎に相を乞ふるおんら

彼ら共甲斐舟ニツキイの愛ありコロウ井シク
を以て告るは彼らに不幸を痛めり

オホツカ出帆再びクナシリ出るおんら
を以て書を以て日本官司へ送りし事

予オホツカより一舟を以て冬を越えし益ありし
を以てニツキイに海にイルコウツカを以てベニス
ルグも以て海軍提督ミンステルよけりを告て再び
日本を以て相おれし人を以て相おれしを以て計ん
予九月よオホツカを以て送りし
イルコウツカに以てりし提督テレスキン思ふ予は過

一日岩谷六巳はオホーツカの上で「テルフルク」は
係子船を上げ、新軍艦を出し日本に捕らえ
しものを放るるのを願うるも予たれを許さず大に
喜ひて「イルコーツカ」に命令せしむる所
定より高射官は他の仕事の間ありて候り
別の軍艦を出さるるの成程とて予も命あり
し再びオホーツカを仰りテイヤナ船をくわん成
クリル諸島の葉葉を上げ且クナシリに向て遣厄
の者のおぼろげをさすべしとあり

コロウ井この記中よりくわん日本人良な事を已に市

この命をイルコーツカに送り、軍艦をいぬれば
よ我國政の伝道ありて和順を好むの事を候り
候時、俄に別舟をさし知らる候に候り
係子船を云らる日ありて捕らえ、俄に別舟と
生命を今も候る候に候り、死する候り、而後
尚和順の心あり候

千八百十二年三月 我多紀年
壬申二月 係日本人を捕ら
オホーツカを仰りテイヤナ 船を捕らんとす候り
此を以オホタ河 オホツカ河
流の所にあり 滴々く候り候り
あり、甚漸滞せり、甲必丹ニニツキイク 中ノミ、
候り候り

豊島の湊港のとうちありし船の傍も洞ひ
忍船又テイヤナの人教を捕へり
オホツツカの船
夫十人を加へ又船中の好者を獲りせん
オ
ホツツカの要利運送のリチカと云ふを副船
トイテキント船ヒラトフ奴を
是を司り
しめて予は属する予ハテイヤナのロイテキントヤ
スキを以て可船の副司りあり

并七月十八日我船は
Eは船の傍も洞ひし由帆す
斗ありしはカムシヤツカ
の海岸にて船船や
日本人もも送る物さんと
船のせぬ彼等

厄は豊島に我が同僚の日本捕り九年のり
ありし人教も同く
實は天命の然りしも
一 歐羅巴の風習あり
且は地人々を西習え
ある事海をせんも
日本の國法に
このめりや
次は其ありて又船

同月二十三日
船を捕へりし
クナシリは向りし
ヨウの海峡又
テフリス海
峽の中へ船を
捕へりしと思
はれり
テフリス海峽
は海峽に
聖玉函島
保あしは
蓋成屋
人
所
名
あり

北道より霧津晴礁より余の舟危く船を破
るべき大厄難く多しなり

八月十二日城下夕七時の上トロウの北岸を略
見出せり霧津晴礁風逆より潮く十のり
テフリス海峡をよこし十三日夕方エトロウソシエタ
ナ婦シヨクナシリの海は深し八月廿八日我舟は彼
我舟は各けりクナシリの故傍港に船を入り
彼港の要害の所十二三所許の要を築き
又く海軍の所は十四の大砲屋を二行に設け
たり我船此港より入るは亦く日本人の晴礁屋

の内は隠すべく物を貯るは亦く馬都よりて物
多し陸軍の海軍も條あり本條の幕を
張出り馬都あり陸軍の屋根より印んぬ
とのなり彼舟も皆陸軍に引付けたり此形情
あり日本人の我舟も前よりあるべきあり我
舟は彼陸軍より二十所許を襲れり破れり
相伝良なきもの二年已のホーシトフの捕へり
舟より少くは彼陸軍の所を突くは亦く
官吏の道よりしき候きし札を日本海軍に
忠にすといテイヤナ船の日本海軍より

甲比丹ヨウサンを何れか取り捕へしや我王
王にわける我王に越境せり事結ぶ拘り次は
カムチャツカの漁港にて碇泊せり日本人を送り
歸る我國より日本へ向ひ抗敵せり之を聞きしを
知しむは申す日本に押えり船をきつて事の
其をを聞きし一若し泊りし能くおゝ或は日本
政府の名を告ぐ一は或は政府のより政府
其を聞きし一後四年は漢に來る一日是に
クナシリに到りたり敷會前より此をを聞きし
海をより展へて語りおぼしむる云々は此の
事

其事も〜予は諒に於て此の港を去り
予諒〜短く云ふがん長き辭に書かぬは
且御旗の云々を詳に所要りのことをりて
此の人の云々甚く思ひ日本政府の可なり
也云々〜とクナシリは西より日本をカエイト
^{甲比丹}船室の船に入して此れを告ぐ一は或は日本
政府の紙細くも此れを告ぐ一は或は日本
政府の意〜日本の官人、始末を告ぐ一は事
予んま我々の意を成る事とのありて是れ
り此の事柄に向ひては此の我々の述べてすよの事長

く且精しくなりしに上你的添言も何んが致
しを俄に治しし我も治ししと云りぬ
彼らもよき事なりと云ふも其れは其れ
三条の事なりといは初めのみ事なり
日本に破船ありし事なり俄に治しし
しるも記さる也と云ふ今日奉る治せん
事い我出するの事には先く一能く治し
何んともぬい治ししを先におちあま
るしとて先我の事を治ししと云ふ
何の請書しし是れも事なりつと云ふ

予語りし你的出りし何れも
い甚く真なりと云ふ予は其れを
止んし山力なり其他の事を書けし
され是を以て名なりと云ふ情事
謹居りし事我の事なり春は其れ
以の事なり也也也也也也也也也
我も其れも書札も實に我の事なり
也也也也也也也也也也也也也
何れも其れの日也也也也也也也
姓名をいしなり也也也也也也也

コロウ井シの名をも知し日本文字の如く書しあ
たらふものもあつた今も書中のコロウ井シ
の名も何れもさし置かず一拾一ありの是をあた
比校せしよ同くありしが物り此で其書を陸
送しんと定の案を奉り日本人の内一人は
書を所持ありシリリの官吏に呈ししと危し
船の破るゝ所の對をせりぬそやめと言ふ所の内
よりシリル人二人見出し彼日本人をえり
兩國陸屋の方へ送りしりたり然るは彼
陸屋の門よりわたり以て大船をり海濱に向

けり^{イシヤ}船を放り予良をえりよ向ひ何れも係
船より只一人或書をも持さりしものをしきと
かへ船を放りしと官長は日本の法あり人を
おしりし合國の法の放りしとていへり此日本
人の他方をい我々日本人と稱せんを計り
尋の計りし名をいり今はしよをいせり
我船とい何の物をも放りし一人の日本人を送
りしりありしやかへ船を放りし何れも
ありしとて相傳日本人を兩國と陸屋
の國を放りし後いしはるりかへりし

間彼の陣より来るを待よ何のたふしありて其の
終り金巻を脱ぎて渡邊をへん張り彼日本人を
上陸せしめし知り陣屋までのがりありしき
このまゝもして戻さるるあり良兵衛も屋敷を
脱ぎて手をあきらめたり然る人形をこゝに
見えし彼の陣屋より只一人なき塚の工とあり

再び深谷をへりて古館を脱ぎ又再び
良左衛門を送りし事

初め我未敵を防ぎ軍令を袖巾に入し
夜直砲のすゝら鈴を鳴りし時よりと云ふ

一む又新水より一は武忠を備えし舟は
水桶を積岸より出し水を取らむと且は序ま
つ人の日本人を陸より上りてあはれ同様にちと持を
しよ肯りしと云ふ始送らるるあはれと云ふ
日本法をてるよあはれを禁めしありはよ依り
俄に形法ありし簡條書ありし日本人は持を
あはれと云ふしめしよあはれと云ふしめしよ
書しし日本人ありし陸よりありしは敵討てし
陣より告ぐるよ日本人のあはれと云ふしめしよ
あはれしよあはれしめしよあはれしめしよあはれしめしよ

しつゝはなすゝめをなすはつと俄に野人
告下しとて他の言ありて去るぬとけ用い夫ら
クリル人木の肉を食ひて姉々体りてクリル辭を
知らざる何をやと知れずとて思ひ日暮人
居るんも彼の傍をたつまよの次中肉をクリル
人未だ彼を逐て引去り門外に押出ぬとあり此
男は流るる老々又而も彼の心は彼をよ
留り度知れぬ官人の死ひつて頼ありとも留る
ゆゑに云はれぬ人か何れか許さるる事
そよ由り考ふるは初より使とい日暮人の阿

しつゝはなすゝめをなすはつと俄に野人
告下しとて他の言ありて去るぬとけ用い夫ら
クリル人木の肉を食ひて姉々体りてクリル辭を
知らざる何をやと知れずとて思ひ日暮人
居るんも彼の傍をたつまよの次中肉をクリル
人未だ彼を逐て引去り門外に押出ぬとあり此
男は流るる老々又而も彼の心は彼をよ
留り度知れぬ官人の死ひつて頼ありとも留る
ゆゑに云はれぬ人か何れか許さるる事
そよ由り考ふるは初より使とい日暮人の阿

其の事いふ事思ひ出せし彼の厄は遭し
其の什物を海村の船に寄しつゝ如何にや試
せんと思ひロイテナントヒラトウの司とある運送舟
の舟主数人を家を彼村の邸にむけ船を寄
りしるをえり日本又船を好むるをそ
彼岸は彼方のりき響くもヒラトウの
事いふ彼村の事を述し其の事いふ物も
ありといふは是を捕る人々の恙なき事也
と思ふに昨日日本人を人を上陸せし日
本官吏の彼村に船を寄りし事を告しめ又

良なるものと理容を説き、物々無き、日本語の
書面をよめ、彼の持をやり、思持の事いふ予
日本官吏と小舟より出逢、船中をくしとて、翌
日於彼日本人相り、告り、日本官吏彼
の書札を讀み、轉る、其の事いふ、俄に
其の甲は丹接話せん、其の上陸をり、
し、信告せり、是は其の事いふ、省の事いふ、詞あり
如何なる、我出、思、其の事いふ、其の事いふ、後
其の事いふ、又遠き、其の事いふ、其の事いふ、云
及、其の事いふ、其の事いふ、捕る、其の事いふ、恙

あつんと思ひしは先事かきかす思又使り
来りし日本人をも船中の座席の肉は尚ほ
我船の船客ある事深き知は出せし
相も俄座形候を知りし日本人を使ふ事
今更益あり我方より屢々日本を更し
送りし事も一も教書をもかきかす
未棄匹ん外あり良在船中と俄座形候
を知られた候を上陸せしめん事い
さる時我言は只一人の日本を
さる時我言は只一人の日本を

事を認むるありしは申す計を候
今更日本入の節一和事を示し
され今止るを候日本船若は
船乗りのありし事ありし
舟人を捕へし事ありし
今更日本入の節一和事を示し
され今止るを候日本船若は
船乗りのありし事ありし
舟人を捕へし事ありし

あまのりて春属を種乳さんと思ひ良太郎の句ひ
唯只形を昔せん思ひの体未家より御くき忠告
を忠告厚しと云はれ信思ち免を失ひ去り南
越やと我子やと予の体と云はれ信思と云はれ家
ありと也予を信しと云はれ信思と云はれ又思
心を痛める松よ中一吾予と自教走一吾
予の信思を去すといはれ信思と云はれ信思の
故例せり人といはれ也我子と云はれ信思の
已よ六年信思の事と云はれ今日日本信思
信思の信思の信思の自教走も計り信思

あまのりて春属を種乳さんと思ひ今一息日本
信思の信思の事と云はれ信思の信思の信思
を信思の信思の信思の信思の信思の信思
の信思の信思の信思の信思の信思の信思
信思の信思の信思の信思の信思の信思の信思
人を信思の信思の信思の信思の信思の信思
ハコウ井シの信思今クナリ信思の信思の信思
と云はれ信思の信思の信思の信思の信思の信思
信思の信思の信思の信思の信思の信思の信思
一良太郎の信思の信思の信思の信思の信思の信思

彼日本人よはるりの一通を指を返し、コロウ井ン
字は成行を知らず、と定めの怒

並の月四日、我々は友人を上陸せし、あ次日其
西へを待て、あ方より舟を出し、近へむ
此時金を後より、渡辺を望み、彼一人の日本
人の某海軍の因に渡り入る、良在集の場所
あり、先コロウ井ン等の在在を問ふ、知
さず、あはぬ、此時船中の法士、彼、話を融ん
と、皆良在集の事を、聞かされ、良在集の、即ち
カユイトに、彼を、法、たすルタコ、その

カユイトに、入り、良在集の、彼りける、予、日本
なる、あは、漸く、海軍、官吏、先、向、る、俄、座
那の、甲比丹、何、上陸、せ、予、言、さ
其故、を、知、す、只、コロウ井ン、の、何、や、を、問、ふ、を
答、へ、ぬ、よ、事、を、と、言、ぬ、と、言、ふ、詞、あり
——、我、は、彼、官、吏、の、言、ひ、の、と、向、て、あ、言、ふ、を
知、せ、よ、よ、良、在、集、の、予、向、ひ、予、實、を、以、告、す、と、
必、す、予、を、その、人、の、あ、と、再、三、詞、を、つ、ら、ひ、せ、
し、き、声、——、脱字ありん、彼、の、岸、に、我、朋、友、を、血、を、流、し、知
ん、と、思、へ、此、歌、の、場、を、き、き、相、か、る、る、あり

時らぬ何ききなる方を身物よめ其予思ふ
よかゝる上は我亦正しく恨を轉さへきりし
我於延も日本人の如く無法冰道を以て
棄かゝる辱き振れり然も其只良き出づ
一言のこゝ外は神捕もあゝ其言を信ぜ
ずいふ事と思ひ今つ意確信を以ん
欲し又良き出づを以降せしめ日本を更
に傳ふを教やうと云へつ神去を信ひ
しと信ぜたり我物よ命しつ時宜し
陸屋に押寄る事よの傳を以て一正切

良き出づの上降しつ後又傳り其のききよ
傳り来りし彼を待たし諒ありと思ひ是より
は海濱まで日本船を奪ふるは実を以て
おろし世を以て返すまゝとありし定先也

日本船を獲ひしつ因を以て我を獲る

同月六日 俄に子船の日本小船を以て
以て速くローイテセントルタコウふ
二船の情状を以て傳ふ舟を捕えし
又スレトウコトサウエリーフ
と加勢もやりりよ連日日本船を
追討奪ふるしるは船人皆逃れ
去りし只日本人二人を以て

一人を渡すある業の内がサウニリトフク捕へ来れ
り予は其を又奪ひしは渡すに屈して何を言ふも只
志をなれし声もえへ工へ工とのこりかへかへも
我事をも解きし事やあへ只ちふ活物あるのこ
何の事もありき鳴呼此のときおん勝の民
まそめ何ぞ我事なを返してんや

次日又つ艘の日本船沖より此海灣にをり来り
何れ日本の大船と見えし予はルゴウをきり是を
驚かしむ但は危しき必静ししき言を以て用
ひししめし只怖しし論しし其船を奪ひ船を

を捕へ来りしと教へしぬ一時行きては彼日本
船をわりの闘争あり我船の獲りしは又其船の
ロイテナントヒラトウ向り来り予は告げし我事
快船此日本船は追つきたる所を知らしむ
かく防戦の用をせしむし止むをば我事
かへし向く流を放つしつ舟しり此日本船人
忽ち帆をあらしむし其船はは渡すをりし
其船中の人の水は入り遊き遊むし其
者ありし其内は我事なをりしし老を以て
引上りし其船は是を向ししり又水り

溺るも何ら此船中凡そ六十人ありと云ふ船を
ハ即ち捕へ来りて之を以て此船をあると云ふは其の
衣履を為し一短刀を帯びていふも其の事人と
見えたり予此田舎をカエイトル使ひ入道と云ふ
予の向ひ日本風を以て町奉行の權をある予も彼
を尋り以れし彼は其の心を安んじ親しむる体
あり一樽酒を以て飲まじ予嘗て一良友と云ふ
えり日本風を先向はれり予田舎の事と云ふ
セントウフ子モ子と云ふは其の船を以て持てる
酋長と云ふるものと云ふは其の事と云ふは其の事

館の港に船人と云ふものあり船は積むるもの乾
勇之風の悪くまます今クナシリ島の港に入んこと
と予は彼は其の始末を略して彼良友と云ふは其の
クナシリ島の官吏は送すことと云ふは其の事と云ふは其の事
忽ち船と云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは其の事
船中人も皆船中ありと云ふは其の事と云ふは其の事
クナシリ島の船中人も皆船中ありと云ふは其の事
を以て其の事と云ふは其の事と云ふは其の事
是れを以て其の事と云ふは其の事と云ふは其の事
云ふは其の事と云ふは其の事と云ふは其の事

人ぢい恙かしていつと彼ら身の上の爲よかんと
思ひかく我あは徳りる前ん、志の、其俸いも
降あゝ是云且傷をいかに徳と云出るとの
も何、又良た馬つ、コロウ井ン等、皆教され
たると云、今又教り、如何あるか、我あは欺
き、や衆、く、ホーレトフの侵掠を怨、く、尔云
つ、或々コロウ井ン等、い恙かして云、く、代、已を
我船、捕、入、多、ん、と、忍、ま、く、か、く、云、く、あ、や、り、く、
良、た、馬、つ、徳、之、条、の、出、れ、の、つ、を、る、ま、あ、く、徳、地、よ
る、く、兵、ん、と、形、ま、ら、く、今、く、く、ナ、シ、リ、の、殺、人

あき、く、く、あ、て、一旦、我、志、を、遂、げ、ん、と、計、く、コロウ井ン
等、を、教、り、た、り、と、云、り、め、く、夫、前、良、た、馬、つ、の、我
等、を、欺、き、た、り、と、云、り、く、再、以、我、船、を、捕、ら、ぬ、形、を
隠、ま、す、の、の、ある、や、い、か、り、い、し、
か、く、思、惟、ゆ、く、と、定、め、難、く、尚、コロウ井ン等、の、存
命、せ、る、も、計、り、難、ら、ぬ、先、彼、を、藉、ふ、企、を、制、止、を
し、如、も、主、と、す、り、や、の、コロウ井ン、の、生、死、の、あ、り、
疑、ら、ぬ、ハ、船、中、の、諸、士、の、意、を、静、む、の、の、あ、り、
さ、り、き、具、内、一、人、の、云、ら、ぬ、我、亦、去、年、夏、を、め、て
エ、ト、口、を、あ、く、と、出、達、せ、る、日、本、人、を、思、ひ、出、ま、い、

即ち今更なる日本船と同一人あり其時
モールとウイルスキイとに名を長けりウイルキ
イも亦云々其の日本名史と此船とよく似たり
且思ひ出や其時モールと已る名を名のり其を
つらきと此時船中の諸士船の屋上集り所
此云りる日本船のモールを知りて甲比丹司
ウ井ンを知りて其言を分明あり何事とも
コロウ井ンその船の船長なり其船の今
後以速く我々の血を日本海濱に注ぐんと見
悟やり且是を於て予彼を流しり其者の

予とあはれり其又コロウ井ンありあはれ活く在り
その実とせんり船に以れ其実を船長あり其
船長のあはれも必しあはれ其船の命を命を
らるる事と見ゆり日本人を船に其命を
念せ止めん天命とてその入るる事由命を
卒に當て所船長の死に此の中は船は日本
政治家の情を披り知ると思ひ定めん思 抑
其船は今まで我々捕えり日本人の船より其
素性もよく且日本の古事は通やり其も之
これ船をあるは獲るも天幸あり其船の

語らざるをえより富平の一日の風習を
其所持の形を以て配するの恰も市西の職人似
たりと云ふは又亦彼を十トシカルムキ故に於て少く
あやり

予亦亦俄に存じ往むるを告ぐその
役をせよと云ふは俄に漢を以て其を以て
但クチリリの方まの口ウ井ンモール号を報せし
以てそのやるる語りの彼此を争ひて云ふは
の虚妄なりと俄に其の甲は丹モールに他其人
共よ恙なく松翁の長く身を自由にして市

中を遊遊するものも皆官卒二人従ふのこゝろ其
よく遇てしものも又予は復る六條令俄
其形も亦た必ずしも其の辭うするありと
予も其れ指し明年の必しも其國に送る所ん
と云ふは彼も心を安んじし中よ又くたり
其國の介漂流の日其人四人はつて俄に語を
流さるに我もあつても今も其用之且ニケールボイク
腫物を病あはれはつて度者様妙妙かよ越年や
病死をへしと云ふは其の夫の自南を介し其
送る所ぬわしと云ふは日本係其人のこゝろを

よあはつ徳んあひし又此四人の侍あは
の船より四人を出しそのまゝ戻りしに
赤い船の水を誂んを船は清ひ且徳の
見勝りし只俄に那人を畏れしものあは
已く為るにあはかきと泣く影ひ見れし
因條の人と尚恙なく日本もや吾等東を
さそを渡りしに四人の老をわく世今定むぬ
そよあはてたかぬ予を傳へ山船は佳日し
傳中甲の老をを船は也集め已く好き布を
あはる如き堂一予をも甲船は所りありぬ彼

水更守皆予りあは流きしりたかぬ徳あは節
て已く俄に形は連行かきしりたかぬ徳あは節
況やう船より船中のあま木此のをさかき
き路き各たかぬ傷はをさかぬ別をわ
流渡りしに赤い船も袖の袖は大夫夫よん
此の時あはしり船は悲歌し給予此を船をえ
船は連れし人あはれり我因條の生死を
さん清く捕えしりあはれし止しきもあはれし
居りしとて十トニカルキ^{片断}と云ふに平生の
まのひ又亜細亞風の好も放逐の習と云此の時

二人の婦人あり〜かきり〜船の側を走り〜船室と
 別室に入りて尤傷むる人〜予も心を驚かぬ予又
 去る處より求〜今俄に船は連行んよのりあり
 千レリの官吏より良き船つをりて我より去る〜
 りのりありやを詳し記〜千レリの官吏より送らる
 船〜と云〜と船の船は〜をゆ〜即ち元は船
 門より始末と予は記〜凡〜詳し書〜
 よ〜と〜

予より船に入りて〜と船の船は〜
 予より船に入りて〜と船の船は〜

對一俄に船人より日本人を驚かす思ふの事は何れ
 只日本と和原の交を驚かす事ありと云ふ事遠し
 より我より不幸起り〜を説き〜又此
 去る處より船より少船〜日本は婦人我より船
 去る處より人々去る處よりエトロフ〜
 之は船中に入りて甚く怖し〜
 予彼を慰めん〜カイトの内を〜
 毛體も葉も去る〜其研取〜
 子孫〜流せり〜カイトは〜
 尚〜身を屈〜茶〜予は礼を〜

椅子をとりよるゝ赤い傍に在りて椅子は居るを
教へ思かへ思ひ没するの客をゆゑ幸よ我前
中の若き外科の妻尚少婦ありて居るは待を
出〜〜とては赤い妻は是れを〜〜とて
赤くは椅子をけし少婦と偶ぬ此少婦は万国の
婦人とも思ふゆゑとて是れは日本の婦人を見
ては此の如く粧も衣袴も目ととの疾くも赤い
妻は欧羅巴婦の粧をめつ〜〜は視〜〜物中
に顔色の志強きよと見たりとて〜〜とて
少婦の顔と接〜白粧のきと知り笑を〜〜

ア、ヨイア、ヨイと云〜〜予は赤い傍の妻は後を
出〜〜欧羅巴の婦人を習〜〜は〜〜免
昔は後よ〜〜は顔色のあを〜〜むりり
赤い妻は〜〜は後を〜〜返り
白〜〜ワル〜〜又一人の婦は十八歳計り
〜〜好き女ありて容貌中〜〜とて聲は
慢弱あり予は赤い妻を〜〜は其の貴
味ありあは法〜〜少の物を〜〜は〜〜
予は赤い婦は〜〜別は法〜〜は〜〜
〜〜は〜〜妻は〜〜や〜〜

か帰の例より知ひあつたか船の接向せし夫より
彼ら宗来れりし母をなむとて去るぬは時既に
去る時又去るをりし書状をクナシリの方人よ
送るぬは亦もクナシリの方人より亦も去るぬは
か船の去る時を再び我船より宗来れりし彼を
つれ行き通ひのりしとて去るぬは底を挿んと
思ひしとて去るぬは次日本船より小
船を出し宗来れりし水と汲んてせしはクナシリ
の方人の報せしや彼ら舟と受け大砲四つを

放てり我船のりし日本船よりクナシリの方人よ
今も我船より和波をりしとて去るぬは
彼ら船の時か船を放てりしとて去るぬは
しつこも先我の傍を著種ゆかか連りし
詳は日本の実情を説明すまゝとて急ぎ
て大事を取りますとて思ひぬ
天氣もよく風も強あつた船を上んとせしは去る時
其の夫より我船中を二つせしめんと云ふゆゆを
許しぬは彼ら船より思ひ船中を二つせしめんと
各々思ひ綱共の巧あら感しぬは去る時去るぬは

マストコルフ橋の上にある架のは登りおせり予彼あり
カユイトをアキしりむりも皆敬して其肉を以り
恰も君の前は出らうとせり又彼は銀盤を以
俄羅那の火酒をよみ其味は我水夫
等も嗜しむる光ある鈕釦ボタン或は彩り漆
たる手巾おしを志す常一は落しおのけり不
持の日本骨量コメモノを出し是と交易せしむ又
赤い水桶アキの中をみるをアキけしを已り船を
水を充んと清ひ其は彼は更号より桶を以り
持守りせりを充て送り来ぬ先程とち我

等を敵のこゝろ人のかゝるはある交をせしむ
予は於て悦びは後よりきかゝる彼は更号を別
と稱しぬ

噴きをりし頃船を海上に出さんと其は
方より大船を放しぬ是彼方より我船の動を
見しは君は相おしと思へり然るに其を
アキ知屋等は無益の業ありき其は其を陋
てクナシリと俄羅那の病は其はぬるあり
長崎は是より後進するといえり此時風忽ち変
りてわづ成るは次日まで此海峡は破泊しぬ

陣屋を去り、午下浦を一時、金巻を流して存
の方と云たり。是も亦なるを以て、舟の再
申す、東より、河を過り、て、東に云り、俄
羅形船の此島を離るる、河の橋を再び渡す
事出たり、といへり。

赤巻博を伴て着、横沙於、初、幸

第九月、十日、横沙、船をまさり、出、
村路を、着、横沙
村、向り、は、風波烈き、り、は、夜、船の、地、の、嵐
東の、河、の、や、き、危、難、は、多、り、天、幸、を、以、て、幸、一、て
船、を、救、ひ、免、れ、り、然、る、は、又、西、午、の、風、より、風

殊、は、烈、き、風、浪、あり、し、初、の、河、を、シ、ロ、タ、ン、の
方、に、向、き、船、あり、と、見、る、世、道、は、高、り、け、ま、し、し、く、
大成、船、を、張、り、渡、る、は、舟、の、流、流、く、は、島、
を、向、ひ、流、き、し、由、由、破、れ、船、を、向、り、次、は、由、り、船、を、
ク、ナ、リ、リ、と、シ、ロ、タ、ン、の、方、に、や、り、忽、ち、ひ、つ、つ、の、時、
恐、れ、南、に、ぬ、此、時、船、を、ま、し、付、索、して、流、き、を、量、る、
船、を、い、れ、こ、島、は、近、す、く、思、タ、七、半、時、討、り、ま、り、の、
十八、尋、の、流、き、あり、し、減、して、十、二、尋、に、成、船、が、り、の、
崎、を、つ、き、ぬ、以、船、を、救、え、る、に、船、を、つ、ら、ひ、の、外、
あり、船、を、投、げ、し、流、き、を、又、二、尋、減、り、れ、り、

海底砂石の如く破面は次第に破を投
せしむる如く破を引くは海に引
徒檣を引り破を引く幸ありて此危難を
免せぬ是計無違の法上等二度の二幸人
命の南の事とカエイトに對居してよきありあり
コロウ井ンと云ふは予種よ官をかねとも
勿の次は予種もコロウ井ン官職姓氏をま
るは同じ魁角左衛門の人と云ふは予種
思ふは俄に邦人の姓名の稱呼は日本人の耳に
馴れず予種を以て予種を以て計し思ひ

予又コロウ井ンの名を種よを呼ぶ中
は彼コロウ井ンと云ふを以て云はるは予種
其人も相おま居たり予種を以て呼ぶ
其報を以て呼ぶは其人を日本人は俄に邦
侯と云ふは其人と云ふは予種を以て呼ぶ
てモールと云ふは柔和と云ふは又煙草を好む
はよき烟草を好むは且能く日本語を解
ありて尤も煙草を好むは且能く日本語を解
と云ふは我亦はこれを以て初に兼念を以て天
祐を以て此日本人を以て且能く且天祐を

此の事をも又かゝる島に居る詞を修せし時
かゝる日本人は校勘をりて収むぬ又島に
ハ毎年已に船は日本の産物を積んでエトロフ又
至り乾果と交易し積荷を積りて然るかの良
を諸門を知りて其の怪しき事之を亦日本人の
名をも其のよかりし其の島は其の島に考へ
予ら手冊を云出 七の島は亦良に居る産
地までも河なりよ其の島は此名の高人ハエトロウ
島にして其の事かゝる修し知りて人々エトロウ島
所々島の高貴の島を移し奉りたり予又良に

島つり姓名くし〜〜〜
コロウジと云由を河りし其の修し且〜〜
郎次りといつ〜〜
形もえオヤコタクリル人酋長をオヤコタと云と思ひ且島人と見え
るやと問ふゆへ予修しと答へり其の奴らつ艘の小
舟も持て漁屋の番人まで且文字をかきしるを以て
書史を勤めぬ又修しとて其の島の産物何れ
南島の島の産物としてクリル人の女も〜〜妻とせり
と云つ、修しを修しある其の島に奴ら自りクリルの
酋長と稱す日本も其の首をき〜〜

たのきなる手様とて已に首を括ぎぬは話して
計り次第我々思ひ南島よりさきと徳島を千三三
の更し使ぢめよ已に狭路を我々の仇をなさ
むと表裡の計をなさぬん又よあまの使よりた
日本人と南島とゆふ事次第又良た事つ副く
ありし者も中途を隠し已に人ゆり来る偽
言を心くすよ善く一旦我々を返さんとて計り
明く又此の如く南島は日本國法にて日本人
二年の久くは英蘭の南島者も南島の後出は
其の南島ゆりしを許さぬ先江戸よめとて

に船来を審訊し後或は生涯囚のてりて
おのづからしをゆりもるる我々のありし
日本人おも高橋少助が二年も南島を
其の如くは法は返すゆりあり

日本海上の難事を懸れくりル此島の事を洋の
船を出しテ只ロウセ飲の各つきたるブユスロレ海
峽保梅は海峡の各地図を又し物々心に向ひよはた
ウルツフシモリの弓海を各けかんに向ひよはた
晴潮のしし星学の試をあるは軍一かき相
此度き海峡よりカホーツカ海より西北迄の
諸をさし又東洋よりワイユケとマタウ保梅はワイユケ

ウルクワキマタウモローの諸島
ウルツフモモリリのおも連ぬる島
又西やうは海峡とあるはつる島の海國も
知はあれはと法をコロウサン海峡と名つきたり
是れ我等と航海の業を共よせり不幸の遭
甲比丹の名を聞きん為あり

第九月廿二日 越前着 檣山越前の大山を遙
空より見れば已に雪は降りては林麓は尚
みづらみづらと雪も烈しかりし故に雨もウルツ
及エトロウの航海は今此時を以てしるも航海
湾と雪は埋るを幸しけ地よりもあまのり也

是れたうといえり風吹所はアロツカの湾ををり
き明るはペテルパウルス港に入んを思ひ候ひは
入風ありかり再び大洋は吹出され辛苦して
港にまをりしるに度ありし船を入る
は夜晴し殆ど強し南の船を破れしを大危
難と云ふ幸しそ免れ候し十月二日 越前
より船は港に入りしは船に破かりし
はつらオホツカのブロヒアント船ありし船は亞
墨利加の機を草を立しトベル地名ありの商人と
属する船にけ船は廣東と馬泥刺呂宋島の名の

産物を持ちては、よとよ那よと交易せんとする
そのあり

相好むるあり日本人を上陸せんを計ひ
り、又我れを朋友と見せしめ、我れを
無事と物をもたせしめ、赤い糸を其胸の
飾りたるに必し船中の海客方とやと思ひ
し、たゞあり、彼れをさし俄に形も日本
國法の如く、俄日本に捕えられ、俄に形
人の如く、因に居り、と思ひ心を苦し
し、然るに彼上陸し、ると同一家と傳へる

の、あり、次同一家に居り、あり、彼れを
お返し、て且、お返し、て且、お返し、て且、

同月十二日、我れは、船中、之次の危難を免
れ、大賞を感謝の爲、船上、て糸を、後、
ぬき、あり、船中、お、上陸、せり、是、事、り、船、交
日本の、海客、より、航海、の、あり、之、の、り
あり、不、同、條、の、恙、あり、信、を、お、船、中、の
辛苦の甲斐ありと、喜ひ、也

遭厄日本紀事附録上畢

遭厄日本紀事附録下

目次

- 一 再び日本渡海の事
- 一 高田屋を船を上陸せしむる事
- 一 松前よりコロウ井シの書物を得る事
- 一 シイモノフアレキセイを卒以て高橋三年クナレリ又ある事
- 一 再び三度日本渡海箱館よりある事
- 一 俄羅斯人を取り本國へ帰船の事

遭厄日本紀事附録下リコルト所編



杉田 豫

譯

青地 盈

高橋景保 校

再び日本渡海の事

高田屋が船に已よ二十年来日本國の港をまじり
り弘く交易を為し航海の事にあたり只政治家
名をたしむしこの今彼ら勲徳の輝くや
やるゆへに素性もやかく思ふもの思ひし相
傳を流し捕え来れりこのあはれ只安心せしめんと

明治五年と東條地と云ふ所の西國使節と來りしと思ふ。次公等は日本に款待せんとせしむるに會とす。めけは固く俄に形勢の急変と日本に數百の士卒の生命を救へるべく思ひ、我方を勇まざるに勵みしきよあり。但予方虚弱ありて、河さる者、極少部加の氣候は堪えらざるを恐る。と云ふ。我亦亦其情を諒し、厚遇せしむ。彼ら亦その心は深き感激し、今もて俄に形勢を察し、日本人と凡く俄に形勢の急変を思ひ、自に告ぐるに、是は俄に形勢の急変の正しを如何

し、本國の人は流しんやと云ふ。我々も其を推し、其の印他ありき。彼原より當りて我々も入くる日本の事、然るに俄に形勢の急変は於て抑も拘りなきもせよ。二西の事、^{モツレ}糾紛を解らん。其は^{ムスホレ}法廷法廷にあり。是は本國の勢あり。是は日本人の所為の急変を解けしと思ふ。其を判りし。其本國の法廷を以て。又日本人の異國の事情を以て。其の急変を以て。日本あり。隣國と益んを以て。開争を起さざるを好まされども。只俄に形勢の急

地を形勢をより一而は俄羅形を能く思ふる
の、但地由の如く日本は隣國との交り可く速
よしてゐるを俄羅形を能く思ふるは、向はとも
西法として異國と交りしれは、其事、海軍の態
あり俄羅形政家の名ありやを知りしれは、向
今とありて、日本は兵彼形勢の如き物
俄羅形政家は條陳を以て、欲する之を、周
く吾敵として告ぐ若し、イルコツカの總督より
ホーントラウをあや、海軍の業は、今く俄羅形を
家の如く、あや、之を、條陳の書を、日本は

送るべきあり、彼捕りて、人々を悉く免さるべし、
いさるべきあり、向一言として、已む身のため、
吾流の言あり、其謀を破る、其流は、
吾國の如き、針鋒を解き、我同僚の捕り、
免く、むの謀あり、事を始り、知り、且、
國法の強弱の大畧をも、
予とあや、情を、
若や、
送る、
予とあや、情を、
若や、
送る、

千八百十三年五月 我文化十三年 癸酉三月 の船の役を為す
又イルコーツカイルコーツカの總督より命あつて 爲探沙部加
於日本渡海の役を司るとしてロイテナント
ルタコウ各を以て代りて 爲探沙部加を以て
しめ彼れ代はロイテナント 館ヒラトウ各を以て彼れ
初次日本渡海の際船ソチカ各の王長となりて
性々クナシリ海上の難風のとどむ形を以て 爲
探沙部加の役を以て 爲探沙部加を以て 爲探沙部加
丹城を以て 爲探沙部加の大船を以て 爲探沙部加
いづれ

五月六日 俄に海水を以て テイヤナセアハツカ
の海に出 同日午に 俄に 爲探沙部加
針路を急ぎ二千里を以てクナシリの 爲探沙部加
役を卸せり 爲探沙部加の海を以て 爲探沙部加
如く 爲探沙部加の海を以て 爲探沙部加
使ひて 爲探沙部加の海を以て 爲探沙部加
とて 爲探沙部加の海を以て 爲探沙部加
爲探沙部加の海を以て 爲探沙部加
の海を以て 爲探沙部加の海を以て 爲探沙部加
の海を以て 爲探沙部加の海を以て 爲探沙部加
の海を以て 爲探沙部加の海を以て 爲探沙部加

小間より我々同僚の始末を委しく官札一我々の
傳へしところの水夫を命じたり也又此水夫の必
ず再び口を福に歸し來んを決定せり也と云
を傳へる吾公の日本國法を知りたるもの
一くわいせりて我々此れを云へり予は國
法を委しく知されたと云つて水夫は向ひ若衆未
再び歸り來んを命じり予はクナシリノ使
告し若衆未を歸し汝等と云はれしを為す所
汝ら主人を捕えオホツカは連歸り今年中
軍艦を備へし威力を以て捕えらる我

國人を返す事へしとは轉る事三より久
くは多し待へりしと云ふ事
亦傳布しけりしを云ふ事教をも言ふ事
亦もなり予は向ひ俄に野帝の初大將 照彦 亦
を傳へり改しりし時を予を以てしり候し
使をクナシリノ使使よりいふ事なき事と云はれ
日本人よりいふ此水夫字を傳へりし事候し
又予はオホツカは連れ歸ん事候し オホツカ
を傳へりし事候し オホツカ 押出さる事候し
相違二千人を傳へりし事候し オホツカ 又予はオホ

一ツか不連銭んといふ公カノ辱まし。是より子細を
てのるゝ然るをさらし必走して我々水吏を使
せんと思へると活同やう予は若くは予は船の
物々何れをまゝあんとすか又云好れは
我々吏あつてのときまゝの事をせんといふ免さう
いふその儀ありぬと予は名を名宗けつを子り
の官吏は流流はるゝをゆんや用く儀をよ虫
箱を括せやうといふせましといふ此附かゝる
日中凡よ安んじく長けりや中一坐を改ん
実義よ予は云らるゝら公は日中河は能通ぬら

今予は水吏よ名せん簡易の詞をば知る
予はあまのやんを疑ひんるゝ予は推
使かりて水吏藤を所一頭を仰て前馬
傷よはるゝはれはあゝ先守一はみりるゝ
の友吏の前よ出るゝ疑ひ降へきゝを説き次
已く何の月の儀種形船よ捕とれ着押沙都加
を留めぬ来リユルト同一室よを道屋のく遇せ
ましゝゝ又他の水吏二人引ル人一人占せ病よ
かり彼方の外科をく治療をせしけり在後
死やうゝ又々度の船よはるゝ病よより連

の平倉をみんむをまきこみぬけぬはるは
まのふ町寧ろ海に屏又リコルトと海陸下
原のくさをもひひゝゝ赤い書を首より万草に
言ふはるをかく初領の吏よりあるくを海
原のくさをもひひゝゝ赤い書を首より万草に
言ふはるをかく初領の吏よりあるくを海
原のくさをもひひゝゝ赤い書を首より万草に
言ふはるをかく初領の吏よりあるくを海
原のくさをもひひゝゝ赤い書を首より万草に
言ふはるをかく初領の吏よりあるくを海

別の盃をんとて赤い酒水まをそを飲み後箱の
原より出く又他の一言を別れ思相に水ま
を山岸に送るやうにわい障あり陸原の言に
赤い酒今水まを託せしむを海とオホツカリ
連仕んそのいなり力にありまのいなり甚
けををばまを彼水まを再ひまよもんやも
難きをみあれなり予れ海と海と一もあれれ海
原のくさをもひひゝゝ赤い書を首より万草に
言ふはるをかく初領の吏よりあるくを海
原のくさをもひひゝゝ赤い書を首より万草に
言ふはるをかく初領の吏よりあるくを海
原のくさをもひひゝゝ赤い書を首より万草に
言ふはるをかく初領の吏よりあるくを海

定ぬ何となく予已よ日本語は通じられ
彼等を行く滞あり言さるゝコロウ井ノ字も
あく在とありいそ何事よ急して料理せん若
已よ死せりし時をそのの破きしるあはれも
かくもそのの果せつゝ厚しと思ひて之船中
予うをを結しるも同意して其く其何と
あゝ思かして其痛し向ひ你陸に往むと欲
せし往へ〜凡く你の事よ隠さ〜 你も
歸り来〜きり時と予い生命を果せ〜きありと
云られい其痛き〜らら同僚の確信をゆき

此れ才ホーワは互命を食〜次〜云〜い
予も能ありやめ之物に其の成就せし時
予も面目を失ふの〜お涙必死せん今予
予を隠むしあり予らあさ〜ま〜予ら水更
も同〜陳屋に往き〜日中國語に悟り結
予今いあり予は免さ〜咽あり陳屋に至
らん〜云り予又云れ〜い結し予も自〜你を送
り結ん〜其痛きを以て結し〜体して其
予〜結し〜も其痛〜い其の教〜あり人〜
云りあ〜餘儀の笑〜佩力ともあま〜持を也

日頃の事を記さんといふは去年の秋二百日
月をくわゝ親友の交りあり今已は千にり
使をせしむるのいふをよする心苦きもの
然るに所々の詞は今年の内は軍艦をたふさ
せんといひし事と拍とさるるのあれを予を再
オホーツカ子連佐人と習せし事と也部次等
不信のものと思ふおんかく予と恥辱をよ
い何しのせよと二百日つ言ふ可貴の詞か
りよと又怪まれぬ事と性質えより態度
ありて諺あり思ふもの数ありしと云ふ

とせざるも今け一大事の討ありと云ふ思
て條程を志し一瞬の事なるは自滅するま
恥辱をあらはれしを怨おれ日中人の言
と〜〜吳邦は因にぬく日を送るに丈夫の
をくや次但し予の因となり首の折し
加は性なると思ふ思ふありて云ふも
奪ひひもよと秀く千にりよ告げられ予
因にぬくもの甲申なるも知る事と馬水
史をきき心あり首の折し加まつれ行す
公の言ありえより武備の勢あり予は其中

又躰まれば御命を惜むる水も今も流る
オホーツカは連行へあつて予ハ命を捨つゝ外
有し其強き此のこゝに敵を切り彼を
細く水まき持きこき思ふ事何ぞも
腹を切り死んてこゝに討た彼遠征する
屍として重箱を以て埋葬するを日本の男
と次々更らる予を以てあつたかす
るのあつて尚残らんあつた予を習せし一言
予々念激の流きこりんと胸長とを刺殺し
胸中の兵士等々周章するを慮らんと思ひ

種ありといふなり

此のこゝに予の悍烈あつた我改羅巴人
作き慕ふやあつて日あるに是を勇士の西行
とて其其人を慕ふ其子孫と此の爲り
榮へあつた是より又予は臨むに能はる
このち予の身は久しうに一族も郷里を以て
此のこゝに予の男と同一カイトは起す
又胸を以て怯く思ふに然るに予を愛する
縁故を知りしに予は向ひ何れも予と胸
長のこゝを教さんと思ひ他の兵士等も及ぶるや

恙怨を執せんがしる物中の火業は火を放
い維り一人のさすまじと聞よは若りるは怯まの
態あり睡中の人を教をを勇たの所為と好
しつや予の然る次必は思ふはあきんて我あまを
さへく奇あり哉け人やかゝる詞をすすより予
益は彼をきし歎ひ也

今田舎を去る處を上陸せしむる事

翌日 係指すあは日限を短くしつて兵部より云おは必は既語かん
り影をいふより其様あり我の要ありきりつて捨去らん
予前を内し其の陸よりいんを陸よりつきし
陸より二人出するといふあり是をいんよりあるは

を海に垂りたる水まあり我の上陸し物に驚き
海濱の溝ありて水ありては人を水まは
クナレリのおまより使して其れをて予は請ふ
まほき水を流るし但我物まを以溝の内
へさるるし水とありては物まを云ふ
ららるるのりは物ま二人の宿まをよ其
兵よりしてこそを急を称せり其の情をを
内二人と予は取れ交むる人といふは彼水ま
まを云ふはいそ他よりいふは但宿ま出速く
を情ありていふのりといふは官まは物ま

僅の相を齎らざるは彼水更に紙してきりり
又けを返せりかしては尚款對の字にありと
思ひしはたかき清なるは是れ日本國法にて
國人より相を交るるを禁むるありと

又彼を人の名に松前せりしはあつとて書
れを認りしは書を予は授けぬ予は是を以て必
系回條の書に有らんは收ひ切らひしは松前
と稱しけを認りて吾公は回條の書に信を交
んは是きは松前は此書を信交りしは是れ
なきは書付ありしは是れ松前を以て押載き言

出さるるは是れ度所にて言声は云りりは是れ松前
我出の幸とぬるは是れ又予は向ひしは松前と
云はるるは是れ松前と指して是れ松前と予は半
俄に松前人ありしは是れ松前と今は松前の
の官使の函にありしは予は松前を以て松前と
云はるるは是れ松前と是れ松前と

予は松前と云はるるは是れ松前と是れ松前と
して是れ松前と云はるるは是れ松前と是れ松前と
予は松前と云はるるは是れ松前と是れ松前と
あはるる中は必は書を以て返せしきやと云はるる

七和の病言敷りよ是れは死をうまぬ水はけは
必逃へしと彼又云りよ明船と船まで公々
船よるより一しつり水まよと船導りて陸地を
往んて予其言よ何をいへしと船中
軍備をきしめぬ次日船の事を又復告りし
陸地より出さるるもの二人を一人と白きものを
振るかの事ありと是即ち七和の病をいふ事速
よみと出さるるもの一人は船水まを伴ひたり
船よ入るよ告りし相およりし言信ありし俄
陸地人おの安全ありし志あり但按針経

大病して十日病食せられ日本醫の治を
受るも効せぬ又後の事信ありし船中
相おれカユイトり入りおの相おせりの書
札の箱を出して予よりしとあぬは内
向の文を俄陸地往洋文とを収めし予
是れを看し二十三日城領解し千シリの友人是
右の執事をおし兵船よりしと七和の病を
を附しんるを治しし事ありし言信ありし
けり彼を治し送し海に思し次第雨ありし
七和の病又船よ出さるる時千シリの友人は治

高の敷原の考はるり波々許容せる。杉前あり
の方を法外由之具秘予は千三三の官吏より送
じりてし已は杉前より送じりてし時花柳の
往來の千日を往來あり予思ふ然るに杉前
其所の者を待つ其つらるる千三三海峡海峡
海濱を詳に測るん欲しし舟にて海峡を
出入せんものを千三三官吏の御実をくしし
杉前も海濱のりるるに其のいふるに其定の
卯へしとてし皆いさるき其後其海濱の情はく
らる毎に訪はるり杉前詳魚を水支持を

御目より予是を胸中の法をよあちよあぬ但し
御方より其の御物を御すること固く禁せり
但し御方より其の魚尾十七尾を始御りり
目より御方の御目より其の御目より其の御目
たうり相おしるる語はる時予はつきりるに
杉前其の書れをらりてし一着し御目あり
其の書を捕えらりてし其の書はるり何あり
子細や不中當ありてし其の書はるり何あり
御の書れを詳に測るん欲しし舟にて海峡を
出入せんものを千三三官吏の御実をくしし

日本の方よりて考ふるに已に俄羅邦人を教
ゆると云ふに其の日本を俄言融くまゝに固
あれり予ら其考をもとて教さんとて其の由
然なるを其を智むるの故に且今亦玉和好
せんまゝの時にさきまじりてその云ふに何かなん
予ら其言は俄羅邦人を教せむと云ふに其部
次り俄言はあはれ其言はくナレリ官吏のてら
出くホーシトフらるるを懐きてかくる言ふそ
あはれ定く其考は堪く其陳を懐ひあん
そを懐ふ者血戦して其の懐を教せん

思へりは其陳金より各士三百余人をくはく必
死を誓ひ各隊を切て姓名を託し其
収め俄羅邦人の初めくナレリあはれ其時
あはれを其前も送るをく其考は予ら其時
公等の幣をえりて互に其の懐ひしりて
恐る血戦は及く公等の大蛇の設を其
るも懐て其考をえく其考は其考を免か
考あはれく其考は日あ人もホーシトフの時
懐て其考は考へ俄羅邦人を飲料と料
及く其飲料は毒を投ぐるは設をあはれと

其の儘又云々下好き辯多とゆ〜と云り
送了慰めんしおと〜け地と今漁奥の時
日水々々あは漁者有人を出して奥を捕ぬ
あ〜そも獲るま〜速く持来る〜と命
云〜と予乞を謝して必んを費するあん
と云りぬいけと予は於〜方去るのめぬ
只親なまぬ〜き〜のを解〜ん思〜いあり
と云くぬ切〜〜けり予彼を送りて漁の
漁ありまゝ〜〜別れぬり〜と支より二十兩
許を以〜陳〜仰ぬ

次の日とてと筆あ〜と加〜書来〜さり〜の十六日

保抄次のり次と云々
推し七月十日のちん即然月方

早夫は彼達の通よき〜り我
方の通も待た〜り我を又役と彼ら陸屋か
身と云ふ〜り〜彼と云〜〜候也〜予ん憂
〜思ひ〜と急き〜彼を運〜入〜ん候り
〜もを附〜てか〜あ〜起来〜ん〜思よ〜皆と云りぬ
彼ら候あ〜あ〜思ひ〜る候〜て予ん候〜は白書
振来ぬ〜子病より〜さ〜や〜か〜一運船
の通〜と返〜き〜と云りぬ山〜を揚〜を
又役を以〜彼ら思〜や〜ん〜候〜し〜

人三千人と校本若干を譲りて板屋の仕居を
作り水更おし共ニ使思是主官ある請ふる証
ありと彼主官を志御とあらを請り
日中読の筆のきく金か一事いひぬ

松前よりコロウ井の書物を傳る事

二十日^{七月}朔 船吏^平タイニヤウ^獄 其れつと
告げぬけ何日 日中語して長官といえる人も
ありあり 予や^ほいんえりるせそり
倣く彼をタイニヤウとせしむ 故船吏も皆彼
をわくせしむ 相た^し席^さの^うを^めし^しら^い連^へつ^て

あんとく^きき^し 故^に彼^らを^めし^しら^い 倣^く
と^報ひ^の 平^平の^事 間^を 先^先カ^ユイ^トす^けは
入^りと^故に^平平^中より^一書^をを^取出^し 是^の 松^前
より^寄り^し 故^に 是^の 俄^に形^をと^りて^を
俄^に出^し 侍^の ヒ^ラト^ウマ^に 倣^く
を^めし^しら^い 野^子に^片ワ^レリ^イニ^ハイ^ロイ^チの^書
と^をす^り 平^平も^も 倣^く 倣^く 倣^く
何^の 平^平を^取ら^し 平^平の^コロ^ウ井^の 書^物
の^大き^い 平^平の^定 二^年 以^前の^始末^も 詳^か
ら^に 倣^く 是^を 倣^く 倣^く 僅^な 倣^く

我々の法官並に水ま字クリル人アヒキセイリ
玉のまて皆恙なく松前を去る

千八百十三年五月十日 蝦夷

ワシリイ コロウ井

ヒヨウトル モール

此の下手に獲果の書やれ我れおろ狗一狩へ
疑念の晴むと思ふ速に此書とテツキ 船の地平小
板ノミイタ
持り船中の諸人ノ漢字を又コロウ井ニクノ自記
を記しつるものよ此書を滴し一見を各各
自し是を落して其の毒を嘗み且其毒は

謝詞を述べて船主お前。死を極免し、今迄
事なれりこそこれ。自記の受用せり酒を
出してたまは祝。あえり是を去る強心け漢にて
皆生命を擲さんと其毒也。ゆゑあり
其毒痛も亦甚毒。きまのあつとて漢りりるは
長子らに船主。病々々書んるを送り。然る
日本國法。一々英國をり。海軍もその高切に
他人の交りも禁。書りるは復もたまは。控めり
クシリ官使の仁術。して其毒を毒をなすコロウ
井。ちを我言ふ毒。へ。よ。命。彼長子ら

の書翰のよりハ告出しては世を去る人あり
彼を拾いんと加意と彼を船を懐より托せり
怜悧の赤い情を以て妻とて之を懐り新の書
笥を抄ひ収め思とて之を以て知れり
彼の家^{ナリ}の生業ハ不も幸多うて新の船を造り
場也一由又赤い情の母妻船は彼を捕りたり
時々かまひくはかむし一悔し一ををす今
ソつ日も健康とて又彼を妻と初の赤い情乃
難を痛く憂ひ自の昔を以て日本國中の
霊地神宮を巡行不出とあり又赤い情の親友

の一人赤い情の難を以てより貨物をも其れを
分ちよ之に身ハ郷里をたもれをきり而も神の持
戒の行者とありて是を以て西の巴人の此國
人を狡詐狼虎とて一収め信を以てするとの
如しよくは是れを以てけの如き一實儀ある
つと感一あえり其外赤い情の親戚外戚等各
そ信する所の神社佛閣は皆て彼を懐り玉を以て
也今今いする彼を捕えり彼を懐り玉を以て
殆ど日本國中を流布也
今日ハ我々の生業の去りとありて赤い情は

別き御んとしてるに法ひ船主等とて一同
新の咽^{トキ}喊^キをあけ也

レイモノフアレキセイを率ひて言橋
三平クナシリにあり事

弟七月廿六日城^七前^月前^日傳來り告りて杉原
船御來り前^日予り領する忠告の言は言
ふんとて其方の次友一人クル人のアレキセイ並
捕りし御座部人一人を伴ひ官船にては受
取んとしえり予り中^に御座部人古官人の内
なると思ひよ前を傳り水使の用ありんとす

是官船のなるは其ん政程を計るよと御り
中ありし事せし不果しと暫くして御座部
のえ申あり其の傳是をえり是其に官船
といえり船の号は帆は赤き糸形を染又條
ある幕を船端に張りその中の帆を立竿の横
振ら各殊く又四巾の長鏡を立つて其鏡の周
りを黒く染くらしき旗を付たりけ給ふ
其人の官位を知らしめり陸奥の方より小
さ敷を建くらし小舟數艘を出し官船を逆
へ是を率て陸奥の方より出たり其是是の行

列らば何なりや其處にて又くさうき前傳の
官船の通り子細をすて速く告知せんや
廿七日^{我七月}我船渡過を望むよ商人出たるとあり
一人古白布の袋を佩カキ着たれ其の膚あるを
きりき人古維あり事をいふにけし但其人は俄
羅形人^{ロシヤ}と見矯く日本といふるは前傳の時
に後よあはれ所あり船中の諸士は是を望んで
俄羅形人あり事をとあり思
け時折し福又も彼處に往く水と取居り
彼一人湖く清の邊よをすりしは我國人の群也

舟のりを見て彼出たると俄羅形人と見し
人只も次三歩歩も疾くをり清の邊よ至
るよ其の清は十歩歩もあはれり我船又も是を
見て其^{ナカマ}頼付ありを驚き返ひし彼制禁せし
思は清をたへし彼を近し其時水源の船を
牽ひ付りる者あり其りし彼りし其りし
水ましイモフとありしを告り其我船又もイモ
フ^{イモフ}とありしを告りし其^{イモフ}とありしを
脱ぎ腰を履ゆるのありし言も出さ其
頻りし清を流ゆる船は清にありても其

下々實は哀あるありし由に予彼を嘆く方なり
我同僚相あて無きものなり官ありしは今
年そのありあはれは幸は存命なりと内閣對
外ニニコフを共々患大病と苦みぬ予は
あましく聞きりある猶中の人々皆首を伸
くあり候と涙んと涙とを振ふるはれは皆聞
りも止ぬし其る事いふを請を付ひカエイト
又いふは亦いふ言ふは此方なるは其れは友人
其行の次官ありし其姓名を橋三平といふ
は人なり命に公に傳ふべき條二ありとて

橋中よりオボヘガキ書法を出ししは漢なる事
三橋三平首領沙都の船中よりリポート告ぐ事今
相済む所の命を與ふる事其日の如く捕く
居りし俄に和人を免し返すに就て慰留せん為之
係未だして面談せざるは國法は違ふべきは你法官
物事此の如く幸方一屢クナリりある
殊に是れより我國より抗敵を以て遇せしは其
懺悔の次第あり今相済む所の事は彼捕へる
人々を連れしめて予を船中を以て慰留せしは海捕
りし人の結果を知りしは但夕刻に彼を陳

局へ預りて一紙應對の數條の書面を呈し候
み紙の如き條の

ホーシトフ日本不属のクリル岬及サハリンを租借せ
し俄蘇邦政家の令とて知れしに不証を
其方の官人たる名にて印章を具し一紙の友
人より送り候

ホーシトフ我々の無きを認めし急物を奪ひ
オホーツカを捕獲せしと云りしに内武器弓矢
銃炮數口あり其久しきを獲て朽ち腐れ
ぬる端あり銃炮の類はたゞ一紙に探

索し日本へ送り候一紙何とあれは後年より
日本に致し候と云りしに思ふに其の如く
之に其不令を奪ひて在り探索し難き及も
あつたオホーツカ上国より別は其の理を添て
ホーシトフを捕奪の不緊しくオホーツカ地方探索
をせしむる由の書札を送り候

はさて日本政家の法をあるを知らし一彼方
良法ありしにホーシトフを奪ひし其の法を
能く知ししに候但此法日本に尚書
ありしに候し其の只其大意を記し

そのあり

船がより北に向きしるゝ如の昔年俄羅那軍艦が
對し投敵せし一旦我國法に從ふ如りて今
其よりハ印し明しあはれざるより及り此に方止
る由命命を以て船を沈めしむる處を捕へし爲
捕らぬ加ふ連行たりり同く如何とあはれし時
其の捕らぬ者もて彼に其理を毎しし是れ俄
着種沙那加ふそくゆゑしるゝも其水更なる
皆流し捕へしし如く治や
軍の首命も於し之年より船がより及り今

一度カホーリカに返りし我方より金む所の証去
をゆゑ運ぶ箱館より及りしるゝ彼より及り
同條村中兵五郎と共し得居し江戸の政事
乞ふ捕へし俄羅那軍人を及りし免し返り
そのあり

其の捕らぬ者もて彼に其理を毎しし是れ俄
着種沙那加ふそくゆゑしるゝも其水更なる
皆流し捕へしし如く治や
軍の首命も於し之年より船がより及り今
一度カホーリカに返りし我方より金む所の証去
をゆゑ運ぶ箱館より及りしるゝ彼より及り
同條村中兵五郎と共し得居し江戸の政事
乞ふ捕へし俄羅那軍人を及りし免し返り
そのあり
其の捕らぬ者もて彼に其理を毎しし是れ俄
着種沙那加ふそくゆゑしるゝも其水更なる
皆流し捕へしし如く治や
軍の首命も於し之年より船がより及り今

予其書の日本人ノ見解をまねしんを收ひ是を
披んり即ち我あり其計縁を詳し告越
したり予是を熱読してつゝ其彼ノ才の危
殆ありしは情をぞあつてつゝありき^{かま}悔しむを收
ひ予々ゆる顛倒出り計ありき又其書に流し
藁未ききりとの紙あり是れへレフニコフの書にて
極く細字あり予是を又且書ひりりいけ人
大病よかりとてつらりりり此振ありとい恙あり
由國の何れとあるとあると思
コロウ井ノ書より日本人の字儀を
終らざり

趣をよしし書にシイモノつより詳よまへしん
然りしシイモノつら偶々日本の因をゆゑ我船に
あり久く之類伴よ有し其書に憎憎や
みや予属しコロウ井ノの語を言はしうと問
はれ書の中よあるとよのこ書に其彼に對し
去れい山吹めあつて源流して我獨り日本の古を
出馬如附の人といはれ昔辛を思へし予も速に
向しよるを差酷あり日本人あり又いつありき
めよ是れ計しよる次と忘れぬのきかり此書に
正書ありのちれれ是れ然りして使の用とい立
し

予ハ其ノ書ヲ實儼と信スルナリ 炭石の如ク
なれり上 報念を起スルノ及リテ其ノ切リハ只コロウ丹
ノ事也如ク日本人の執事を取不法を知リし
係極メ其ノ又コロウ丹ノ日知人待過メ法善ノ日本人の實善ト若クハ
一知メの内通也と云フニ蓋シテ大ウの傷ヲ受メルニ至リ
其ノ傷ヲ實善ト對シテ 是レモ亦善キ事ナリト云フ者然レモ
其ノ事ハ正ニ其ノ書及ニ平ナリ 畧可ク知ルニ止
我等レイモノフニ種ノの事を取汝リタメニ
其ノ書ト共ニ送リ送リ送リ 忠ニ對テ予其ノ書と
以テニ平ニ善ク一ハ甲也其レ 係レニ領
取レ 唱ルモオホツカニ出帆其書一 尤屋

まゝ其ノ急キテ今年の内ニ 糸釘ふむと
又水車を船に載せしむるを 謝す也

クナシリ出帆オホツカ船泊の事

弟七月廿九日 我々朝 糸釘と共ニ送リ 予ハ其書
とリ 船中の法書ニ 莫ニ百尾を送リ 予ハ其書
の事キニ却ク心と痛ク 何レノ不 轄リんとセ
クと 活シ 其レ只抄種茶 拂良家 酒少ニ 安ぬ
刻ニ 彼ノ所持の 糸釘也 其レ 佛船ニ かけし 糸
釘也 云々云々 糸釘 以 糸釘 以テ 再會ス
其レ 其レ時 錫もん 糸釘の 隣リ 糸釘 糸釘

去る一今家にてあるものか如しと云ふは
你の所持の品は雨迄とて一你も知らざるに
旅波の身は一瞬の間も在らざるものと彼
言ふにどうい天の加護ある何れ危難の恐ある
やチサイ！チサイ！大将

是れ小心ある物なりと云ふを云ふ

今より路を志きあり程何れも十歩に且云い天
等のまじきる人あり何の恐も危ふむるらん
大なる情予を星家とあらん

又予の衣衣を志きと云ふは予の志は予の

固より志を馳まよむらんと思えり然れ共
かゝる時々も疑を起す捕らるる俄に邦人の
りて年の内は果しと思ひて又馳まの肉
あり予を是れ思ふあらん予は予を志き
よへんといふもや再命をぬさしと疑ものも有
るに於て予は友を以て誅しとてめて今年の内
に再命の期を死するありと云ふりテウ益梅は詞
解せん

俄に邦人の日本詞を
言はるるに大なる云ふ

かゝる時々も別れとて志を上げ海路を

ときき十あるを遅く速くオホーツカの港に船を合は
 港の官に我船の事を知る報を告知をりぬ
 ありしにオホーツカ上りより日本者あり候る條
 程の事及イルコツカ上りより松前あり候る
 事ありしにオホーツカより日本通りのこと
 日本人キセルフを我船に來りぬかしてオホ
 ーツカより帰るに十の事あり候る程の事
 候る破損を修理し八月十日城の天を祀り
 候るの事候るに八月十日の日本渡海に
 かりぬ

第三度日本渡海船の事

此時南風を逆ひサハリシの海流は流し二千リヤで
 始り松前の海より九月十日我八月二十モの
 港ありとユルカニユス係船したトモ海流白崎湖と指し候るに定
 西八年に候るに誘厄利亞申舟ツツト
 川各所のの湾口より岬より人家人相をて望
 んたりしに三時頃風あり港に入り候るに
 向く逆風起り候るに候るに暴風逆浪
 値し候るに再び湾口より吹寄れぬ我未だ
 知り候るに候るに候るに候るに候るに
 別て暴風多あり候るに日本渡海よりあり候るに

此等滞り多し〜〜〜但け時食ふる〜

三月以後并四月頃の航海よりセントウイス諸島

係船より日本の南東に大洋海中にある に向くをり日本小濱 係船より南東に

より小内は風波を免るべきにされしをて船を音

押沙都知し回き冬の〜次波地と冬季もこれい

係船より押沙都知と山極北地とあるなるに 必し多し時を

費さくけし〜〜〜暴風のつき〜の十二日

にして風も和し〜〜〜難を免じ然并九月

カニの 我九月 ヒエルカンユ工湾より入りし船は此

頃より一艘日本船我船に向ひ来るを予ロイテ十三

トヒラトウをきりては船を遠志ありし速しその

船を伴ひ来りし其船は日本人十八人ありし

我船より舟よ返りし思ふ〜我船より舟よ返りし

好き港占河のそめありしと聞ひしはより二十

町許南よサンカロ 係船より南洋とあるなるに 要し岬あり海

の深さ二十尋ありし云へり彼より吳邦の船を飲ん

よの好しありしありし〜我船より甲比丹アロウトン

千七百九十六年 我寛政八年 丙寅 ありし〜エトモの港より船

を入んし船にて彼より舟を返りし馬を〜と云々

是とも肯りし〜〜〜我船よりフロフトンの

画の地景は依々牛を求めんを頼りし東風
戻し針政を穿きし日午の以のあは南て大あり
陸向のあは多の地を列りぬ條ある幕を張るを
又出ぬけ陸向の方より一艘の船を出し舟あり
内まくり人十三人と日中人老人あり其日中人
言由を語し南ては着岸所於かし往き前く十人
あり陸を送る居るへつ平流と唱へるもぬ彼云に
ふか松前守の命にてけりて来たる世船を衆船の
港に停しむあり又船中へ飲食の物あきや此
所の官人より命をとり何物も持らんとあり我亦

甜水と乞ひぬけ思さるの詞をまらせ中橋舟中
を彼に託しぬ船をきり船り十一舟の浪きりて
底に沈ある高み船をたらぬ
次日彼船が舟人船にて下トモより四り馬り彼船
に水をたると送り且鮮魚及蘿蔔を賣り我亦
厚く謝して復二十の舟を託せしるる名をとりて
再び持来りけりて言ふもよありぬ風向て
換やし船の個共を修理せり又其船をも彼船
より水取船と鮮魚船と送り船中の者も亦
莫く飽り但我方より是を頼りんとしるるが

文の事あつて心を痛めぬ

廿六日我九月於波船又あつてコロウ井ン箱館より
出づ書翰を届りぬ其書は港の前の山より
白き旗を翻さし一書ありて其書は波の書と
船をせりし一書の書は波の書とやりし一松本
せりの所ありけり先水主平蔵を教導と
しとあり其書は我宗よりありし初日は日本
官使を復しし其の船は代りあり他志
長官と由りきよ水主を人となし守りありし
日中人の實候は尚もさし思ひしとて放しけ

水主を船へ入りの教導より引ひぬ

己は水主は是より夜も泊りし船を
めし夜を耐えし向ふ方の岬と對岸船を
あけし火を焚きし一船の船
白き旗を立し二の旗を照らしし
のし我船よりあり官使の命にて船を湊内へ
導んとして港の下使一人を伴り初めは彼
指揮は長ひヤマセドマリ海抄上巻
西北巻と云ふは破を
おぼしぬけり其のかりあり高湊内へ入りし
東風の好きありし

此度亦^も馬^も我^が同僚^{どうりょう}を何^{なに}や^やも^もも^も同^{どう}り
箱^{はこ}館^{たて}の居^いたり^{たり}松^{まつ}前^{まへ}甘^{あま}水^{みづ}部^ぶ伊^い賀^がも^も已^いり
此^こや^やも^も馬^ばの俄^が死^し形^{かたち}人^{ひと}を返^{かへ}さん^{さん}を料^{りょう}理^りせ^せり
去^さり予^よは不^ふ做^ぞ雁^{がん}形^{かたち}を拂^{はら}良^ら象^{しょう}の軍^{ぐん}效^{こう}れ^れ
後^ごを去^さりし^しを河^かり^りぬ^ぬ彼^かも去^さり^りか^かして次^{つぎ}の
日^ひ淺^あ肉^{にく}を入^いらん^んを約^{やく}し^し赤^{あか}い^い清^{せい}も返^{かへ}り^り忠^{ちゅう}漢^{かん}
思^{おも}へ^へ終^{つひ}取^とり^り不^ふ糖^{とう}燭^{たく}をた^たき^き黄^{わう}船^{せん}を出^い
我^{わが}船^{せん}を去^さりし^し也^{なり}

廿八日^{にじゅうはちにち}我^{わが}船^{せん}の^の海^{うみ}峽^{きょう}より^{より}去^さり^りて^て馬^ば
船^{せん}を^を去^さり^り箱^{はこ}館^{たて}の^の海^{うみ}峽^{きょう}より^{より}去^さり^りて^て馬^ば
船^{せん}を^を去^さり^り箱^{はこ}館^{たて}の^の海^{うみ}峽^{きょう}より^{より}去^さり^りて^て馬^ば

むは^{むは}あ^あの^の此^この^の船^{せん}を^を去^さり^りし^しの^の事^{こと}は^は次^{つぎ}か^かして
赤^{あか}い^い清^{せい}も返^{かへ}り^りぬ^ぬ彼^かも去^さり^りか^かして次^{つぎ}の
日^ひ淺^あ肉^{にく}を入^いらん^んを約^{やく}し^し赤^{あか}い^い清^{せい}も返^{かへ}り^り忠^{ちゅう}漢^{かん}
思^{おも}へ^へ終^{つひ}取^とり^り不^ふ糖^{とう}燭^{たく}をた^たき^き黄^{わう}船^{せん}を出^い
我^{わが}船^{せん}を去^さりし^し也^{なり}

次日^{つぎのひ}又^{また}少^{すく}あ^あり^り白^{しろ}き^き旗^{はた}を立^たて^て岸^{きし}より^{より}去^さり^りて^て馬^ば
我^{わが}船^{せん}の^の表^{うら}檣^{かざり}も^も白^{しろ}き^き軍^{ぐん}旗^{はた}を^を立^たて^て即^{すなは}ち^ち赤^{あか}
き^き清^{せい}も^も返^{かへ}り^りぬ^ぬ彼^かも^も去^さり^りか^かして次^{つぎ}の
日^ひ淺^あ肉^{にく}を入^いらん^んを約^{やく}し^し赤^{あか}い^い清^{せい}も返^{かへ}り^り忠^{ちゅう}漢^{かん}
思^{おも}へ^へ終^{つひ}取^とり^り不^ふ糖^{とう}燭^{たく}をた^たき^き黄^{わう}船^{せん}を出^い
我^{わが}船^{せん}を去^さりし^し也^{なり}

此度前々書は我同僚を何事あるやと問
云りしが松前より予のクナレリ云々の勤を以て
此度の事も然し予を内儀の儀とて我同僚
の一二の免しを御ひし命を受くは恩討を以
て周く衣膝を改之と云ふ周く予も亦ユニホル衣膝の各
を穿ちぬわしと云ふ書我方の通しキセシフを
以て而して予を述べて云りしが松前甘行の
次く長官商人より傳ふオホツカ者同より此
事箱を寄書をして出さしと云ふ予も予に
其商人は是れ自れ書さよと云ふおのひり
彼未時日を費さんるを忌むと云ふ此を以て

わ改りたる意對あるは胸中の徳意も皆表後
を改免側は長しと云ふ予威儀を以てオホツカ
想智の書寄るべき給ふ包してたりと云ふ書り
授きて云りしが列してイルコーツカ總目より松
前より御の書阿る其いふ大切あるは予書
甘行の或は此度の長官は授へたる書りその
書己に書せんといふ云りしが俄に形の花書より
我甘行は御しと云ふ書を予に甘うあはしりて
あはしりて予書し御の書り取らるは我に書を致
し候も缺き難らぬ御の書りよすしと云ふ

許さしりきまきし日本官人よのお見れ少あて
おーかーのん上陸きくし朝ぬ赤い青又云
りり日本あ官人い有興えき落しおとーし
時你お落し上り落きしを施きくしと鳴呼いり
倭傲の僻あしして他邦の物ねえありあか
の禮多あしてまきまきや且予もコウフル子ウル官人
の儀の織る所ぬ俄に帝國の法に随ひし
帝の聘使の正しして許す皆むしきと昔りぬ
赤い青點ししてゆえり思次白又赤り云りり
彼もあ人より云りりお見の時物りきし

及官人等も送へらやと予に生理を著ぬ赤い青
又所りりり所りのま書をせりりりりりりり
まりの意に随ひ又イルコワカ上目の書にお
見の時まきおらんよのりも儀せし色ぬ又お見の
時よの返者を認め定むるし云りり予著て
銃手十人軍旗と官旗とを携りの二人お見
二人通しり一人を送へり予コロウフル子ウルの
格法よて性んお見の礼を我國風を心し操を
屈せん予り椅子官人よ撥を予り落し空へ
しぬとれ我も彼もあても是編り我等

由刀と帯とをゆ〜我脱占件の由刀と
外前〜似像と〜其理を察せよ予の異人か
〜と前情^{ヲカハカ}を察せし書〜と仰ぬ
翌日高橋又由〜其〜の電と云らるる
脱り〜其の脱りのよ〜其〜我友
目許容あり予諸官の前て事理を述べ
皆〜一云物と〜其〜長官ある人
海濱の客舎に會〜イルコイツカ上日の書
字とあり〜午時より其の降り船を
〜と云と述ふ〜又新〜一言告〜其〜

字のルールス

毎板より其の和葉讀みたる印は用ひる旨也其
靴ありカラス履てシヤホキと云カラスと云る中
も用ひる

〜と云る〜一脱入〜其〜
ある〜志〜諸官目益〜ルールス
〜其〜序〜其〜因〜其〜
〜と脱き〜^{其大少其旨}〜^其〜
〜の心〜^其〜
〜と因〜果〜其〜
〜と脱〜^其〜
〜の帯〜^其〜
〜と脱〜^其〜

ありたい何よ左端ありんぬ御を帯へ只
其末のこころもゆるゆるあるまじき日也
る家より履を脱ぎおするに候し知れり
あし改羅巴風といふあるは恐る日本人也
キチ御とありフルーク改羅巴のを去るに我邦の孫
長の如き度き業あるものを忌むフルーク此
代より後我邦もその如く御より御に用ひさ
るゝの候はしと考ゆるはあはれま當あり
て入るに我方も是を以て種々其れを改羅巴スアリ
の徒と罪人といふ御も是れを種々其れを以て

我邦を洗是て出さしんえらめや

其の傍りう言を以て然して昔に改羅巴極
の周なる振ふ之法系均敷けしは又其西ん
りもあはれし予忽ち時宜き意より實裕の
法を考へ其の術を云々い我方にて振削の事
故をありし時より其の案ありてラールスを以て
スクウン係揚よそわ和菜詰し戸外に用ひ簡あり靴あり
俄に形法してロシヤと云カラスといふ中にも用ひ
取替ゆる有りかゝるは如何も其の術を以て
あし大なるおしましと十分ありしに候し其の
種を失ふるありしに候しスクウンは日本の靴

の事一予速よ公、ラールスを統く年の戦て
歴入んことを我ち自ら告げ居りしに
此夕傳ありし由、又何の事ぞ歟、
云りしに、ラールスの事を動無き事成
我官目も同き事、ラールスを統く
ラールスを統く事ありしに、彼等も
ラールスを統く事ありしに、
羅巴比の事、ラールスを統く事ありしに、
今日中、ラールスを統く事ありしに、
其傳又お見えし、ラールスを統く事ありしに、
其家の事、ラールスを統く事ありしに、

別、ラールスを統く事ありしに、
我ちラールスを統く事ありしに、
通、ラールスを統く事ありしに、
査者、ラールスを統く事ありしに、
小此、ラールスを統く事ありしに、
お、ラールスを統く事ありしに、
の、ラールスを統く事ありしに、
居、ラールスを統く事ありしに、
此の、ラールスを統く事ありしに、

天ありは是四世の飾り取を以て送く一と
朝一海一也

通事ヲキセシフと日本人の所々彼國の處
禁成其國の法は入るにあらずし知
中一彼を陸に連行んとせり固より是を
一日布く飾り取れあむ日本人の所々一
りれども何自らに日本語を能く通するを以て
日本人の所々一此の飾り取れ危難の如ら
んものと思ひし一此の飾り取れを以てキセシフと
かれ若らるる日本人の所々一捕えん也

な一い忍く事一之平一人を捕えらるる有
ま一今予の日本人よあ一此れ一は後日往
く予の勅を以て一此の飾り取れを以て一
かち勅ある者よ一此れ一は後日日本人と
時の為たり一此の飾り取れを以て一は
く飾り一此れ一は後日日本人と
乞りゆへ他の使者も一此れ一は後日
あ一は後日

箱館官舎にて日本官人と相見の事

翌日約きの時針を装へる船に種々此旗を立て

あゝ勝をさすゝあゝ我を運来りて云りらゝ彼
官舎を徳を揚とてんゝ性屋いと臣九時
あ果い旗を拘とてんゝ我出彼母子宗後
るよけ船より楫夫十人ありあ勝云りらゝ此
内もあ貴の老多り交りり今日此形状を認ん
とゝ楫夫とありあ勝とと楯を操りて改
陸巴風とありあ勝と向ゝ操りあ次只若勝
操出い也いあ勝とをもちあり我官旗を前
り置とゝ軍旗の日布旗此中央より立ゝ性も数
十艘の着人のあ勝とあ勝と共母渡運とてりぬ

官舎と渡也とてアガリハ堆いみとてあ勝あり官舎はあ
庭あり日布旗各率勝とてあ勝とて並指りあ
て勝先岸より上りあ勝とて船はあ勝とてあ勝
りあ勝とてあ勝とてあ勝とてあ勝とてあ勝とて
報とてりあ勝とてあ勝とてあ勝とてあ勝とて
るやとあ勝とてあ勝とてあ勝とてあ勝とてあ勝とて
とりり向きて旗を掲りてあ勝とてあ勝とてあ勝とて
可あ勝とてあ勝とてあ勝とてあ勝とてあ勝とてあ勝とて
信家の戸を開りりあ勝とてあ勝とてあ勝とてあ勝とて
あ勝とてあ勝とてあ勝とてあ勝とてあ勝とてあ勝とて

日本人の椅子を貸い事ある者せしとラールスと
スクウンに形をせし一廳の入りは徳官日各
軍後指し軍指し陣を穿ちあふ力を佩ひし並に
ありし其容体のみ異なりありし事も亦ありぬ
予彼の長官ある人の並坐せしをえしと二歩計り
進み腰を座のよはれも頭を膝に倚し若
襟をう又た右は點種し椅子は傷じり
然るも一時時許も詞を後なきは予先通の
キレシフを心しせん決まあし一取しおん
ありしありし不徳ある官人ありしと只微笑

せり其内は千三より其ありしと去年長
むる者其たは長の人に向ひ何なり云し一
セシフより通せしき彼者又予に向し礼を
かし俄に形治して云りし俄に形人あり日本
濱海を播利せし今いふ事の事なり
治りオホツカ官日此條所の書して其の
情も通しぬし予彼に因りて昔より然る上の
予を捕え人を免しゆきんりの報ありし
然るも我ありし今やその報もわたりし予
喜ひし改むるべし相彼に確實に俄に形治せ

けりるに尋なきぬ後よせり村上貞助とてコロウ
井ノ子俄所部語を言ふくいと云り
かゝて互の控伺も終り予サウユリに持せ
イルカーツカ総督の書札を紫箱に包めり箱
より取出して自ら其外題を言ふ有り又清く
サウユリツマ返り箱に収めし通りの又受け
む通りの事と云ふ以て其年如き長官
も持て彼を言ふ狗の上指す又年長たる
也其の信りぬれ彼を言ふ事と云ふ
事をもんて其日其より年々其の事と云ふ

目を押屋と云へり予サウユリツマを
予は彼物を通りの事と云ふ彼者人の命を
一む彼又此を言ふて我亦少くは管を言へ
とて中を言ふ予は彼物も取収め
其後村上貞助我亦の偶に直りき我亦の名を
以て怒り詞をかけ我幸福をかへし後云り
ハ甲比丹コロウ井ノ子初め其余人を言ふ
予の物も言へん但妙如く彼亦おん言ひ
國法よてあきりしと云ふ人にも我亦をかへ
し予の事と云ふ此後其の事と云ふ又

側よりぬ相平あり漆器は砂糖の入り蒸
餅を焼く葉を出し容ぬ丸一時斗を擲
此を退き赤い旗と共は砲を回ぬ但酒の
トラトウの命一我々の海より海を又白砲
イルシナシーの旗を揚飾へ但砲の砲を
放つ風は吹き日本人の禁する事之故
ありあけ日本は俗政羅巴風は物を放つ
事なれどもこれを懼むた之志は日本も
仙臺の産より傾國を出入の時必流を放て
かきとつたり

今日らぬ晴の天氣を旗飾りを見る人々
亦数多あり旗かりきは旗飾りをおき今
二國和睦一初は彼官の言を合し之を
一又彼等洋人の國人等は我々の威勢を
示さんなり

このことと我々の告り又官の命
しを我々とコロウ井ンをおんをむへ
即ち我々の親を御へ此は今も
数度コロウ井ンと書を送りし彼より只
畧の執事とて収票の如きなり是の

替ちを日本へよす。後我方に送れり何
事も情としてあきまりあり又晩よりコロウサン
よりはお父のよを願望き。この書名を志
念流送る。成りて也

次日赤松家又少舟にてコロウサン等より面会き下
其時い通より村より助と他のつあ寄り席に陪
まゝ一運より甘味の物を出さん後者も過り
のこゝに居る。といえり予等とけお父の
将きとのあれり予は濱よりあつた二本の旗を
船に遺りて予は只属官と使と後手五人を

後陣。是を我同僚と逢ふ。事はわくと云
ひぬ。翌日四時赤松家の使船にて返りて
は後者。昔は其船ののりて出

予は濱よりあつた。己はコロウサンは彼友舎の
門ありてあり。是をわつる。其色あり健き。政
屋毛の指をき。剣を帯あり。予は是を見
る。其次第をも忘れ。赤松家より先は船より浦
より。久々。いんき。れは彼のお鳥も。あり
あり。お見。此時の赤松家の。お鳥も。あり
者あり。日本へ。我は。物。と。き。色。見。れ。情。を

おしつやみふ其をを少一 避く我の誤話
を妨さざりた

相予コロウ井ニと互ニ問答一コロウ井ニと其々
との始末の大畧を語り予ハ本國の事及彼の
親戚朋友の事も告あとして後予我の
今年の内は着様ゆが加へゆんとの事
思ひはあてを越へて云らるコロウ井
とわらる向の日本國法や我を囚の如
きくは何れも速よけをを出帆する
志の日本國人の云々のを告あんとす

予も是を語りて互ニ色き内の再會を
期し別日也

此の映し及んて嘉慶其年として年若き
男を伴ふ彼の妻の巡洋は出りしと
あつた如く語りて予は我を告あし彼
子も船中を看やめぬ
其を懐いて船を迷ひたける付物を我船
よちよちと語りて語りて船中
并危人の跡は取しと語りて彼も其
事とをちよちと語りて船夫也

酒を飲めんと欲せざるは云々ハ俄蘇那も
 日本も舶来品と同ク氣味よくて酒を好
 んだるは故日本海流のときは危きよりを
 知らざるは我舶来品の味を知るは已
 後方の酒を倍々よとて又其味の際
 より持来品より酒類中極上を好むと
 候りぬ然るに彼は云々にして徳林の
 徳念丸メル知の卓硝子窓をあかす
 あり出に云々其味は云々のクナシリ
 舶来品は此の如くは候ふ物を云々収めよ已

日本の官目よ呈せん思ひ云々の味返され
 云々の如くは候ふに候ふは云々の味
 候ふは其味は實に云々の味は候ふは
 味を云々の用あり且國法よて云々の
 品は何れも候ふは官目よ候ふは候ふは
 物えり候ふは云々の用ありと云々去る迄
 何れも候ふは云々の用あり候ふは
 ひとつ双の少刀とテーセルヒース極上卓硝子を更
 収め候ふは候ふは候ふは候ふは候ふは
 長一秘藏候ふは候ふは候ふは候ふは

後けんていさうかして戦中に入つて返りりりり
 別は臨つて又云りりり日本國法としてる書を予々
 家又諸ふらこのあきりも感之せめ〜日本
 風として卷窓を〜あきら〜せよ〜てハシ著サカツ
 キ孟といえらこのを予は送りりりりりりりりり
 刺肉力は代え用由サカツキと添として塗りりり
 次自前と敵とけけ好度船への性取として強
 空風が買ふれりりりりりりりりりりりりりりり
 是よより〜と〜の被壯年あり通〜りりりりりりりり
 代りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

明のゴロウ井ンを初次其為の人とを神も送ら
 明より〜と〜ゴロウ井ンし書管を付え思其
 書を看らばなれりりりりりりりりりりりりりりり
 ら好思まの物〜官司の書札付ふりりりりりりり
 つ度上陸しおえま〜と〜

我方より日本官家も信を此証を取らば
 思ひ此使はさる〜りりりりりりりりりりりりりりり
 物〜予人等の路〜りりりりりりりりりりりりりりり
 予送る〜兵白旗の〜立〜上陸〜と〜と

俄陸羽人を交るる中国へ海船の事

茅十月廿七日

傳抄本編十月二十日とあるは我々の
記と合はず我九月廿七日とある

艱苦を以て 阿頼布の良日こそ 早天よ言田尾を
遠甘みの山ありて身も思但病中ありて寝
衣して身ありて 予病よ生痛よんを痛めしと云
まいたるは収めて病い事と愈りやうと云
コロウ井ころ同く 病よありと云人は予の病に
全快きくしと云る

赤い傳布に 日本人の西士の信きしるる情を取
ちしみの書けは字字恨ししと由と云りぬ
九の時予只サウユリとキセレフを従く白旗を建て

彼漢の官舎に到りしと日本人の 我あを程餘
や一の次出會き我捕らぬ人おと皆亡しと生
門ありとあり何れも 莫あり 歐羅巴風の情を
衣しり但アレキセイのいれ日本風の情を衣し
初予は彼未と進へる内は日本人の ことを用ひて
程餘 次くは味級を指し平相本を前
出くしれを以て 彼未を我すは 且日本おあ
の情を本編コロウ井ころ記するは 載きしものを
予は傳へて 御座るのゆゑに 政事よ言きし
と云はれりて 日記に 我あを卷きしり 我出

邦又日本に恩を討てては公卿士族等
名を出して召めるの者人^{ケンブツ}の船出づる所の路も
廠を以て我舟を固くしてはてしなくテイヤ十族
師を設けて我舟に護持する所の福妻等一同
手紙の序を叙せり甲比丹コロウ井ン等二年
三月を以て再び此船を以てはてしなく
せんかゝる皆熱き涙を流して福妻等の
収む福妻有松祥子等一箱ニコロウ井ン其
同件を以てはてしなく福妻等のニコラーフ神の
神前を以て贍相を為してはてしなく日本人多くの

少形にて薪水を乞ひ又蘿蔔一千穀粉五十
余俵及他の食料之を櫃を以てはてしなく我方
より渡りしも此の故に受納せしむ云々
日本人等々是れは友愛ありける返答前の
カラス人共のカムシヤツカニ云々まゝの格用は備
らるるありし故に是れは友愛ありける返答
福妻等入んしむる所日本人数多し我福妻等の
福妻等皆年々是れを制せしむる福妻等の
福妻等代りてはてしなく持てしなく福妻等を却
りてはてしなく返答あり

又日本一二の法方集と通ずるの自助無功部
 乃その上を蘭通しり我船は訪ふ所なりけり蘭
 通しり常々長崎より去りクリーセントル船名
 のレサウの唯名をいふに長崎より到りて時のナラスタ
 船のちも又して其時の俄所法客の名を暗
 記して語り且少く俄所法客もいひ又排
 良島法客も通せりといひ法客をカイトト
 改所毛風の客に彼も船中を看とめぬ夕
 りをうあう他人の看人等

但胃の斗中にて婦人の船に入るを許さば

船の角の上より混雑しり其の昔年は今
 止りては是れ疾風の威を以て彼をいふ
 追はし又船を看よす婦人のいふ
 言ひけは我船をいふに我も昔年を以て
 彼もは許しはるのいふをいふに其のいひ
 謝をり

前の法客も存ありはるなり貴徳
 臨し我も昔々ナラスタの船に移りし其の
 着持所於此に遊し其のいふをいふに彼も
 通しりは又其のいふに只千八百十二年我文化八年辛未

モテハヤシ

羨望せらるるお軍の画像の顔数枚ありしを其類
縁に硝子を添きて画像のまゝ安納せしむる
く其ら江戸に送りありし

癸卯十月十日 我九月
廿九日

コル曰コロウ井この記すと此なるを以て考へ
己の形を費せしき設も同じよ又日本名家
よりきて蔬菜鮮魚陸禽魚介諸品送るは
其よりかして高田念斎少舟数多を曳出
港より我船を曳出りり又ひつこの形は年
長より通るより其よりコロウ井こよの形を告

吾船は送りありし港に到りし時其とき
別れし如形また其の聲を費して祝はり
其の傍も其舟の如の形を立し舟の形
またテイヤナ平安を以て我方よりも彼ら舟
後の幸福を祈る如く心奪り別れし如
かくて日本海濱を走るこの時の如く其の如
く其ら暗く大雨ありし船の漏水をたぐ
汲出た水は深さ四尺に及び忽ち船を沈
つき危殆を極めし漸く風止し雪降し其程
を志のきき癸卯十月三日 我請へテルロウニス乃

みあやまの思

同月^廿日^我請我出^給るに船乗を属^し給^りぬ
相我^出るへテ^ルフルク^と出^して^は已^に六^年を^経
た^りぬ^は是^{より}速^くは^なら^ずに^は我^威服^を受^け
ん^を慰^めの^先にあ^るを^願ふ^べし^と今^も入^る体^を違^は
せ^ぬ日本^人との^意接^し我^出國^{より}日本^の風
俗^を知^り且^に其^中の^経済^のも^亦者^者貪^利あり
和^蘭人^の流^も亦^ある^に日本^の捕^り給^らる^人
の^生命^と身^は危^から^ずと思^ひは^天命^め
を^守る^人皆^のお^もふ^心の^も亦^ある^に如^を違^はめ

互^の俗^を異^なし^るも^亦大^國の^後身^交る^は関^の
へ^き大^事と^して^平和^の由^りを^り互^の
人^民の^利を^重ん^だる^は漸^にあ^つき^て基^をて
未^だ終^らず^に成^行き^らる^に實^は天^の祐^也

テ^イヤ^チ船^の信^時の^甲比^丹セル^ワニク^と船^のあ^る
は^港に^沈き^るを^恐れ^るカ^の限^り濱^の砂^地
は^引揚^げら^るも^亦大^洋の^波濤^は高^くり^き
り^ぬ此^の如^き箇^々倉^庫の^用と^して^は此^の記^を
在^る人^等と^して^はコ^ーク^と及^びフ^タヘ^イロ^ウセ^と船^の具^を出^す
て^は濱^の地^を法^政の^爲に^隣接^せる^に要^す細^に互

地方の事を知り又航海志を一一遠隔せる
國地を求むる使ありしむ但一テイヤノ船
彼地をたぞ遣くる人ありしを知らん
まらとの目注の事とまらあり

村井憲任

遭厄日本紀事附録下畢



